

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 榎本 香織

本論文は、従来伝道手段と理解されてきたメディアの宗教的意義に対して、ラジオに始まる公共電子メディアを宗教的実践の土壌として捉え、そこに発現される宗教的想像力の展開を、「聖性の拡大」という独自の視角から論じたものである。

論文の構成は、問題設定を論じる序論に続き、日本の1920年代から80年代における宗教放送の諸相についてNHKや新宗教の実践を通じて論じる第1部(第1～3章)、韓国系アメリカ人の芸術家ナムジュン・パイクが対抗文化期以降に創出したビデオ・アートの展開過程と、そこに通底する宗教観の役割を論じた第2部(第4～7章)、および結論からなる。

第1章は、日本の公共電子メディアの黎明期におけるラジオ受容について、ラヂオ気分という鍵語を軸にその宗教性に迫っている。第2章は、メディアの関心が装置から番組内容への移行後の展開を見るために、NHKの宗教放送の変遷を整理し、修養から教養、さらにこころの問題へという焦点の推移と、戦後占領政策の影響、新宗教に対する扱いの不公平性を論じている。第3章は、公共放送の主流から外れた新宗教諸教団の電子メディア実践を取り上げ、主体的なメディア利用を通じた宗教観の拡張や、ラヂオ気分の再現とも言える宗教的期待感の獲得、自らの社会的役割の再確認が見られるとしている。

第4章では、パイクが師事したジョン・ケージの影響から禅や不確定性の観念に接し、ビデオ・アートを着想した点を説明している。第5章では、パイクがヨゼフ・ボイスのシャーマニズム接触を介して、母国韓国の巫堂文化へと回帰し、メディア観を変革させ、芸術実践にシャーマン的意義を付加させた点を明らかにしている。第6章では、サイバネティックス概念の創出者、ノーバート・ウィーナーの情報学的言説に対する、パイクの宗教的解釈を考察している。第7章では、マクルーハンの地球村観念へのパイクの評価を論じ、80年代のパイクの衛星芸術が仏教的縁起によるネットワーク形成であり、マクルーハンの「神の声による聖なる共同体形成」とは位相を異にする点を明らかにしている。

結論では、以上の事例検討に見られる電子メディアという新たな社会空間上における、様々な実践的試みが、人びとのよりよき生に向けた聖性拡張行為であったと論じている。

議論の中心となる聖性の拡大の概念規定が不徹底である点や、検討事例の選択理由や背景説明が十分ではない点など、課題も多く残されてはいるものの、新資料を発掘し、メディアの黎明期・普及初期やビデオ・アートにおける広範な事例を従来とは異なる枠組みに位置づけ直し、その宗教性に切り込んだ独創性は、メディアから見た現代宗教論というだけでなく、新しいスピリチュアリティ文化の研究や現代宗教と芸術の関わりの観点からも新たな貢献として評価できる。

よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。